

は喉の疾病に効果があると私は考える。ただし発病してから1年以内のものに対しては、治癒率は高いと思う。発病3年以上のものに対しては数例試みたが、期待した効果は得られなかった。2年未満の患者に対しては、私はよく説明して10回ぐら

いの施術で症状に変化がなければ中止している。

この治療により多くの教師の声をもとに戻してあげて感謝されるということは、無名の一鍼灸家にとっては望外の喜びである。

西島功

貿易会社に勤務中、過労のため失明する。その後、東京ヘレンケラー学院針灸科卒業。開業年数30年。第一回経絡治療学会に参加後、経絡治療一筋に今日まで臨床を積む。

望診の達人

高松文三

開口一番、池田先生は、「今日は生徒になりきって勉強して下さい。」と言う。どのセミナーに行っても、一応我々は生徒のつもりで講習を受けているつもりなのだが、先生は念を押すように「生徒になれ。」という。

鍼灸道というものがあつてすれば、その三つの成長段階「守破離」のうちの「守」に徹せよということなのかも知れない。師に言われたことを素直にそのまま何の疑問も抱かずにどんどん吸収してゆく段階である。ここが一番忍耐の要求される時期だがこれなくして次の段階「破」には進めない。「破」とは師から学んだことを一応自分なりに消化し切って、その上で今度はすべてを再点検する時でもある。それ相当の判断力が芽生え出すのもこの頃である。そして最後の「離」の段階になると自分なりのスタイル、治療体系ができる。治療家として一家をなしたと言える。

池田先生の「生徒になって学べ。」というのは、疑問を挟まず、取り敢えず先生の言うことに素直に耳を傾けよと言うことらしい。(それにしてもよく質疑応答に時間をかけたような気がするが…)

それはともかく、今回も色々学ぶところが多かった。とはいえ、私はノートを取るのが下手なので原則としてノートを取らない。かといって自らの記憶力に自信がある訳でもないで、結局たいていのことは忘れてしまう。ではセミナーが無駄かと言うとそうではなく、その効果は量り知れないものがある。殊に今回のセミナーでは東洋医学が西洋医学を補ってなお余りあるという確信を得ることが出来たという点で大いに収穫があった。先生は病状や生理、治療のメカニズムなどをあくまでも東洋医学の見地に立って説

明する。変に東洋医学と西洋医学をミックスしないのである。その様が私には小気味よかった。それから普段会うことのない同業者に会えて色々刺激を得るのも楽しみの一つである。

一月あまりたった今でも覚えていることが少しはある。おそらくこれらは自分にとっては大切なことなのだと思う。以下まとめてみる。

「治療はあくまでも補が基本。」

いかなる病も初めはどこかの経が虚することから始まるのが大前提である。病状をまず二つに大別するとすれば、「陰虚陽盛」か「陽虚陰盛」ということになる。前者の場合、取るべき処置は陰を補すことが第一で、後者の場合は陽を補すことが主眼である。という訳で基本はあくまでも補である。

「手段が補でも結果は瀉。」

ふつう炎症は熱を持っているので、補法は適さないはずである。が、患部に知熱灸をすると結果的に汗がでて、瀉の治療になるという。これは食養療法でも使われる方法である。風邪が熱がでた時、食養では「第一大根湯」というものを飲む。これはおろしたダイコンを熱い番茶に入れ、醤油を足したもので、熱くてフーフーいいながら飲む訳である。そのまま寝ると眠っている間にびしょ汗をかいて朝起きた時には熱は下がっている。これも、手段は補でも結果は瀉の好例と言える。

「比較脈診では病状を正確に把握できない。」

左右の寸間尺の脈を比較してどれが一番虚しているかで主証をきめるというのは分かりやすいという利点はあるが、正確な病状は捕えられないという。そうではなく、それぞれの脈状を診て判断せよとのことである。が、これは難しいと思う。先生は、絶えず脈状とその人の持つ症状を関連づけて診る癖をつけておればそのうち分かるようになるというのだが、…私は先生に現代版「脈法手引き草」のようなものを書いて欲しいと常々思っている。それは、特別な師匠を持たず、患者さんの体を師として治療に励む人にとってこの上な

い助けとなるに違いない。

「一生面倒見つもりで患者さんに接す。」

当地、ダラスでの開業も15年近くになるが、この間ずーっと定期的に来てくれる患者さんが何人かいる。これらの患者さんのことは大体よく分かる。そして、この人たちもある意味で私を主治医のような感じで何でも相談してくれる。頼られているだけにいい加減なことではできず、こちらも真剣になる。こういう形は患者さんと理想的な関係だと思う。ただ池田先生が言われるように何かあった場合、見逃さずに指摘できるだけの実力を養っておく必要がある。

「望診はインスピレーションである。」

昔から東洋医学的診断の華は「望診」に尽きると言われる。脈診や腹診も素晴らしいが、やはり患者さんを目診で、パッと病状を把握するのは、東洋医学ならではの妙技だと思う。その望診たるや、決してジロジロ見るのではなく、初めに見た時のインスピレーションで決まるといふのだ。ではそのインスピレーションはどうすれば湧いてくるのか。それには、日々の地道な鍼灸の訓練しかないという。ゆめゆめ気功や瞑想や第六感訓練などに走るなど警告する。この点、先生は至極オーソドックスである。つまり先生は、「守」を時間をかけて、じっくりやれと言っているのだろう。「守」という根っこがしっかりしていればこそ、いつか「破」を肥え、「離」の段階に入り、やがて大輪の華を咲かせるということらしい。

高松文三, D.O.M., L.Ac.

1982年、ニューメキシコ・サンタフェのKototama Insutituteを卒業。1988年よりダラスにて開業、現在に至る。鍼灸に加え操体法、マクロバイオティックも指導する。現在、テキサス州・ダラス市にて開業する。